

Ⅲ 発達と発達課題

37 子どもの発達と発達課題

西村輝雄

1 到達目標

- (1) 発達段階の視点から子どもを理解する。
- (2) 発達課題の理解と対応を学び活用できるようにする。

【キーワード】

発達段階，発達課題，乳児期，幼児期，児童期，青年期，成人期，エリクソン，ハヴィグアスト，ピアジェ，コールバーグ

2 発達の定義

(1) 発達の概念

人間の発達とは、生まれてから死亡にいたるまでの心身の構造的または機能的変化の過程である。発達は、身体や精神の両面にわたるものである。身体の発達にみられる量的、形態的、機能的変化とともに、精神的には知的、情緒的な変化などが発達年齢に応じて進む。このような心身の発達は、子どもが成長するに従って、心や体の両面にわたって互いに関係しながら変化する。そして、その変化は未分化からしだいに分化へと進み、さらに全体としての統一が行われるのである。

また、発達には成熟と学習によるものがある。成熟は内的な原因による変化であり、身長や体重が増加することなどである。学習は経験や訓練を通して考え方や行動が変化していくことであり、知識や技術を身に付けることなどである。

(2) 発達段階の区分

発達は連続的であるが、ある時期が、他の時期とは明らかに異なる特徴をもっている。そこで、発達の過程をさまざまな観点から区分することができる。「身体各部の発育の状況」「運動能力の発達」「論理的な思考の段階」「心理社会的な状況」「精神発達の構造的様相」などを観点とした区分がある。

- ① 身体的発達状態を基準にした区分

C. H. シュトラッツは身長と体重の発達過程において、ある時期になると身長の伸びの高い時期と、体重が増加する時期が周期的に繰り返されるとして、次のように区分している。

i 乳児期 ii 中性児童期[第一充実期(2～4歳) 第一伸長期(5～7歳)] iii 両性児童期[第二充実期(8～12歳) 第二伸長期(11～15歳)] iv 成熟期(16～20歳)

② 社会的習慣を基準とした区分

J. A. コメニウスは次の四つに区分している。

i 母親による教育の制限(1～6歳) ii 母国語による学校教育の時期(7～12歳)
iii 高等教育準備過程としての学校教育の時期(13～18歳) iv 大学教育の時期(19～24歳)。

③ 思考の発達段階を基準とした区分

J. ピアジェは思考という働きが発生し変化する過程を、発達段階として次のように区分した。

i 感覚運動期(0～2歳) ii 前操作期(2～6歳) iii 具体的操作期(7～11歳)
iv 形式的操作期(12歳～成人期)

④ 特殊な精神機能を基準とした区分などがある

運動・知覚・記憶・思考・情緒などの精神機能のうち、特殊な機能の発達に着目し、それを基準に段階を考える。

3 発達の各時期の特徴

(1) 乳児期

さまざまな刺激に対する感覚や、口のまわりに触れたものに吸いつく反射行動がみられる。人間の顔が識別でき、養育者との間の愛着(アタッチメント)の形成と情緒的なきずなの構築がなされる。歩行の確立と言語の獲得。一語文や二語文の話ができる。

(2) 幼児期

運動能力や言語能力が高まる。ピアジェのいう前操作期であり、自己中心的な直感的思考やアニミズム(無生物にも命があると考え)的思考がある。また、自我の芽生えと社会化がこの時期になされ、2～3歳頃に第1反抗期がある。

(3) 児童期

情緒的に安定しており、教育を受けて知的な学習が進む。児童期中期からピアジェのいう具体的な操作機に入る。

(4) 青年期

急激な身体的成熟がみられ、運動機能が著しく発達し、第2次性徴が現れる。性的な衝動は青年が自己を見つめる要因ともなる。また、抽象的な課題についても論理的に思考できるようになる。

青年期は自分とは何かを考え、自己の価値観が社会の中でどう位置づけられるかを考える時期である。さらに、自分が他の誰でもない自分自身であることを確信しなければならない。エリクソンはこのことをアイデンティティ（自我同一性）の確立と呼び、乗り越えなければならない課題であるとした。

（５）成人期～老年期

身体や運動の面においては青年期が最高である。しかし、知能は生涯発達の視点から見ると、さまざまな領域で発達し発揮できる。成人期や老年期においてこそ、特定の分野において熟練した能力が開花することがある。発達は、死まで継続する。

4 発達の法則性

・発達過程において個人差はあるが共通点を見つけることができる。その共通性を発達の法則性という。

（１）発達の順序性

身体的成長や運動の発達では、頭から胴、腕、脚の順序で進み、身体の中心から末端の方向に進む。

（２）未分化より分化へ

すべての発達領域にみられる。例えば、新生児は刺激に対して全身的な漠然とした反応を示すが、やがてそれぞれの部位の運動として分化していく。また、言語の発達でも、単語から多語へ、さらに、文節として表現するようになる。

（３）自己中心から社会中心へ

幼児は、自分がすべてであり、他人との関係がなかなか理解できない。主観と客観の分化ができずに自己中心である。やがて、自分と他人、主観と客観の分化が進み、他人との関係の中における自分としての行動ができるようになってくる。

5 発達課題の理論

子どもの発達過程においては、それぞれの時期に現れる達成すべき課題がある。その課題を達成できると、子どもは、自己承認や社会的承認によって自信をもつことができ、後の発達課題の達成につながる。逆にその課題が達成できないと、劣等感や社会から拒否された感情をもち、後の発達課題の達成・習得が困難になる。

発達課題については、いろいろな視点から論じられているが、ここでは、4人の理論を紹介する。

(1) エリクソンの心理社会的発達課題

人生を8段階に区分して、それぞれに発達課題と心理社会的危機、重要な対人関係、心理社会的様式が設定されている。

① 乳児期（基本的信頼 対 不信）

基本的信頼は、乳児期の主に授乳関係を通じて作られるといわれる。唇でお乳を飲む行為は、食物摂取という生理的な意味ばかりではなく、後の人格発達の原型となる心理的な意味もある。乳児は口を通じて自分の周りの世界を学んでいく。この時期に子どもが世界は自分を養ってくれ、頼ることができ、信頼するに値すると感じることができるとか否かで、その後の親密な人間関係を築き上げていく土台が作られる。

② 幼児期前期（自律性 対 恥、疑惑）

この時期になると、幼児は肛門括約筋をはじめとする全身の筋肉が発達してきて、自分で立って歩けるようになり、排泄をコントロールすることが可能となる。発達課題としては、排泄と保持という体験を通じて自律性の感覚を身につけることができるか否かが重要となってくる。うまく排泄ができれば親にほめられ、失敗すると恥ずかしい思いを、幼児は体験する。また、自己主張をだんだんしはじめる頃であり、攻撃の手段として自分の排泄物を武器として扱うことも時々観察される。

③ 幼児期後期（積極性 対 罪悪感）

この時期は、侵入するというモードが主流になる。世界にどんどん侵入していき、攻撃をしかけ、自分を主張していく積極性と、そういうことをすると自分は罰せられるのではないかという罪悪感が発達課題となる。これらの発達によって、積極性に富む子どもになったり、罪悪感の強いマゾヒスティックな子どもになったりするとされる。男の子の場合には正面攻撃によって思いをとげ、女の子の場合には、自分を魅力的にすることによって、対象を引き付けようとする手段の違いがある。いずれにせよ、子どもは、自分が世界に対して積極的に取り組める存在であることを徐々に認識していく。

④ 学童期（勤勉 対 劣等感）

学齢期に達すると、幼児性欲の抑圧にひとまず成功する。日常的な勤勉が主題となる時期である。子どもは学校で急速に知識や技能を身につけ、仲間との集団関係を育成する。この時勤勉さが十分に成功しないと、劣等感が生ずる。勤勉さが成功するということは、物事を完成させる力とその喜び、周囲の承認、自己の有能感や自尊心といったものが得られるということである。また、学校での同年齢集団が、子どもの社会化の力を養う上で重要な存在となってくる。

⑤ 青年期（同一性 対 同一性拡散）

青年期では性欲がふたたび表面化する。これに基づいて自己概念が新しく現れてくる。生理学的変化と社会的な葛藤とによる混乱の時期である。新しい自我同一性——自分がどんな人間かということを確認することが課題となり、これに失敗すると役割混乱が起こって同一性拡散という病理が生ずる。人格が統一されず、社会へのコミットメントができ

ない状態に陥ってしまう。青年期は新たに出会う世界とかかわりを結ぼうとする。青年は同一性の確立を目指して試行錯誤しながら、やがて自分の生き方、価値観、人生観、職業を決定し、自分自身を社会の中に位置づけていく。

⑥ 前成人期（親密さ 対 孤立）

この時期の発達課題は、親密さである。自我同一性を確立したものは、他者と真の親密な相互関係をもつことができる。これは、異性と仲良くなることを意味する。そして、性というものを通じて、心身ともに一体感を抱くような、今までにない親密さを体験することである。体験される親密さは、自分と異なる性別、肉体をもつ他者との相互性という点に意味をもつ。これに失敗すると、孤独をもたらし、以後の心理的成長を抑制するとされる。

⑦ 成人期（生殖性 対 自己没頭）

この時期の発達課題は、生殖性（生産性）である。生殖性とは、次の世代を育てていくことに関心をもつということの意味する。また、結婚して子どもを育てることだけでなく、社会的な業績や知的、芸術的な創造もこの中に含まれるとした。自分自身にしか関心がもてず、自己没頭という状況になると人格の停滞を示し、この発達をうまく乗り越えられない。

⑧ 成熟期・老年期（統合性 対 絶望）

成熟期の発達課題は、統合性である。この時期は、人間の生涯を完結する重要な時である。今までの自分のライフワークや生活を総合的に評価し直すという営みを通して、自分の人生を受け入れて、肯定的に統合しなければならない。統合性を獲得することができれば、心理面の安定が得られ、人間的な円熟や平安の境地が達成される。しかし、この課題に失敗すると、後悔や挫折感を体験することの方が多くなる。すなわち、自分の人生を振り返って絶望を感じることになる。

（２）ハヴィガーストの発達課題

ハヴィガーストは、個人が健全な発達を遂げるために、発達のそれぞれの時期で果たさなければならない課題を設定し、それら発達課題について次のように述べている。発達課題は、歩行の学習のような身体的成熟から生ずるもの、読みの学習や社会的に責任ある行動をとることの学習のような社会からの文化的要請により生ずるもの、職業の選択や準備、価値の尺度などのような個人の価値や希望から生ずるものなどからなっている。しかし、多くの場合、これら3つのすべてが関係している。

① 乳幼児の発達課題（誕生からほぼ6歳まで）

- i 基本的な生活習慣（歩行、言語、食事、排泄など）が身につけられ、それらが自立的に行われること
- ii 集団行動に必要な、命令、ルールにしたがって仲よく、社会的な遊びができること

- iii 親や兄弟など、他の人に親しみや愛情を感じるようになること
- iv 性の違いと性に結びついた慎みを学ぶ
- v 良いことと悪いことの区別を学んで、良心を発達させはじめる。

② 児童期の発達課題（6歳から12歳まで）

- i 個人的、社会的に必要な基本的生活習慣の意義を理解し、自立的にその向上に努めるようになること
- ii 徐々にその大きさが増していく仲間集団の一員となり、協同していくことができるようになること
- iii 性的役割の区別を理解し、自分に期待されている役割について関心をもつようになること
- iv 日常生活に必要な概念・思考力・判断力が発達し、良心が確立すること

③ 青年期の発達課題（12歳から18歳まで）

- i 容貌・感情・生殖機能等の変化をもたらす、身体的・生理的变化、成熟への準備をすること
- ii 自己の思想や感情を表現し、自己を把握するのに、より適切な言語表現を学ぶこと
- iii 同年齢の男女との洗練された新しい交際を学ぶこと
- iv 両親や他の大人から情緒的に独立すること
- v 経済的な独立について自信をもつこと
- vi 職業を選択し、準備すること
- vii 結婚と家庭生活の準備をすること
- viii 市民としての必要な知識と態度を獲得すること

④ 成人前期の発達課題（18歳から30歳まで）

- i 配偶者を選ぶこと
- ii 結婚した相手と一緒に生活していくことを学ぶこと
- iii 家庭を形成すること
- iv 子どもを育てること
- v 家庭を管理すること
- vi 職業生活をスタートさせること
- vii 市民としての責任をひきうけること
- viii 気の合う社交のグループを見つけ出すこと

(注) 成人中期、成熟期の発達課題は省略

(3) ピアジェの思考の発達課題

① 感覚運動期（0歳から2歳）

- i 運動と感覚を通じた外界への働きかけ
- ii 対象の永続性が獲得される。

- iii 象徴的な思考が可能になる。
- ② 前操作期（2歳から6歳）
 - i 自己中心的な直感的な思考
 - ii アニミズム的思考
 - iii 保存の概念が不十分
- ③ 具体的操作期（7歳から11歳）
 - i 具体的場面から保存概念が成立する。
 - ii 脱中心的な思考が可能になる。
 - iii クラス概念の形成が可能になる。
- ④ 形式的操作期（12歳から成人）
 - i 具体的事物を超えた思考ができる。
 - ii 抽象的概念が操作できる。

（4）コールドバークの道徳的発達段階

道徳性の発達には基本的には一般的な知的発達と変わることがない。道徳性の発達を認知構造の変化から説明している。

道徳性の発達を促進する要因

- ① 道徳的な認知葛藤の経験
- ② 役割取得（他者の立場になること）の機会
- ③ 公正な道徳的環境の整備

第一段階	罰回避と従順志向	正しさの基準は自分の外にあって、他律的。親や先生のいうとおりにすることが正しい。処罰をさけるために規則に従う。
第二段階	道具的互惠、快楽主義	自分にとって得か損かの勘定が正しさの基準。ほうびをもらい、見返りの恩恵を得るなどために行動する。
第三段階	他者への同調、よい子志向	人間関係の維持が目的。身近な人に嫌われたり非難を受けるのをさけるために行動する。
第四段階	法と秩序の維持	社会の構成員の一人として社会の秩序や法律を守るという義務感から行動する。
第五段階	社会契約、法律の尊重、及び個人の権利志向	道徳的な価値の基準が自律化し、原則的になっている。個人の権利が尊重されているか、社会的公平であるかどうか問題となる。
第六段階	良心または普遍的、原理的原則への志向	人間の尊厳の尊重が正しさの基準。普遍的な倫理観を持つ。

- ・段階の移行は常に前進的であり，後退することはない。
- ・子供は段階を一つ一つ登っていく。飛び越えて発達することはない。
- ・どの文化圏の子供でも発達順序は同じ。

6 人間関係の発達

いじめや不登校の問題の背景として，対人関係処理能力の問題が指摘されている。友達とのささいな一言で切れるなど，ちょっとしたトラブルを改善できない子どもが多くなってきている。相手を思いやる心や言葉による問題解決の力が弱くなっている。これらは，友達とのかかわり不足からきている。人間は，社会的な存在であり，人とかかわりの中で成長発達する。人間関係の発達は，他の人とかかわりの発達である。

(1) 0 ～ 2 歳 (対人対応の文化)

- ① 6～ 7ヶ月・・・他の乳児や幼児に関心をもつようになる。
- ② 9～10ヶ月・・・他の子どもの衣服や体に触れたり，言語をまねしたりする。
おもちゃの共有や取り合いをする。
- ③ 1～1歳半・・・おもちゃや遊具よりも同年齢の子どもに興味・関心をもつ。

(2) 2 ～ 4 歳 (友情の芽生え)

- ① 2歳・・・相手の反応を考えた行動をとる。
- ② 3～4歳・・・同情的な態度をとる。相手の感情を損ねないように自己統制ができる。

(3) 4 ～ 9 歳 (遊び友達)

遊び仲間が増え，かかわる時間も長くなる。集団生活で社会的適応が発達する。競争や協力により，人間関係や社会的地位が理解できるようになる。社会的標準による批判ができる。友人の選択，排除をするようになる。同情，嫉妬など社会的感情の素地ができる。

(4) 10～12歳，13歳 (ギャング仲間)

「仲間」ができるギャング時代の到来である。仲間の力が大きく，家庭や学校の力をしのぐ。この仲間は，自発的に形成され，反社会的・逸脱的行動にはしりやすい。

(5) 12歳，13～14歳，15歳 (親友の芽生え)

基礎的な知識と技能の訓練の時期である。自我の再構成，社会的適応ができる。欲望も強まる。孤立的，感傷的になる。内面的な「心の友」ができる。

(6) 15歳～・・・「第2の誕生」の時期。感覚、知性、感情などすべての領域で急激な成熟がみられる。自己を確立して社会とのかかわりがもてる。また、人間不信になり、書物や音楽、芸術などに興味を持ったり、社会不適応が見られることもある。性の目覚め、自我の危機。

(7) 青年中期・・・統一的な人格、社会的な人間の基礎ができる。親友の存在が重要になってくる。

7 自己理解を育てる

幼児期から青年期までの発達課題はだいたい理解することができてきたわけであるが、そこで記述されているものはあくまで標準的な発達の姿であり、実際には、個人によってかなりの違いがあることに留意する必要がある。たとえば、青年期に入っている生徒が児童期前期の発達課題を達成できないでいることもありうる。

それぞれの発達課題を達成するためには、人とのかかわりの中で達成していく場面が多い。そこで、幼児・児童・生徒の自己理解を育てていけば、発達課題を達成するための効果的な指導の一つと考えられる。

(1) 乳児期～児童前期の自己理解を育てる指導

幼児期の子どもは言語能力が十分には発達していないこともあって、言葉によって自分を正確に表現することは難しい。したがって幼児の場合、言葉に代わって遊びが心の内面を表現する手段となる。遊びの中で言葉が用いられることもあるが、子どもの内面の多くは行動によって表現される。そこで、子どもの自己表現を読み取るために、動作や表情などの非言語的コミュニケーションに対する感受性を高めておく必要がある。また、読み取った自己表現を子どもが自己理解を進めていくうえで重要だと思えるものだけを、言語化して伝え返すことも大切になってくる。

児童前期は自分のことについて調べ、自分の様々な側面について気づかせることなどが挙げられる。具体的には、生活科で自分が生まれてから現在までの成長の様子に気づかせたり、身の周りの人たちとのかかわりの中で自分の長所や良さに気づかせていくことで自己理解を育てていける。

(2) 児童後期の自己理解を育てる指導

児童後期に入ると彼らの自己評価は、正確に現実を反映したものになっている。しかし、実際には個人差が大きく、一部の児童は過大な自己評価をもち続けたり、他方で、現実よりもずっと自己を過小評価する児童もいる。

過大な自己評価をもつ児童に対しては、周りからの不承認や批判を受けたときにひどく

傷ついてしまうこともある。したがって、この時期の児童に対しては、本人の努力に伴わない成功についてほめちぎったり、ちやほやすることのないように留意すべきである。自己の現実の姿が客観的に見ていけるように少しずつ指導していくことが必要である。

過小評価する児童に対しては、低い自己評価に結びついている要因を特定する必要がある。そして、その要因での低い自己評価が現実の水準に達していないか見極める。もし現実の水準に達していない場合は、その要因の技能や能力を高めていって、自信を持たせ、自己評価につなげていく。また、その児童の自己評価が現実の水準よりも自分を卑下しているような場合は、その児童の自己評価そのものを高めるような働きかけが必要になる。

児童の自己評価が現実よりも低くなる原因の一つとして、親が高すぎる水準を子どもに期待しすぎると、児童の自己評価が低くなる。この時期の子どもは、誰よりも親からの承認を望んでいる。承認が得られないと自己を低く評価してしまう傾向が強い。したがって親としては子どもの現在のありのままの姿を承認し、そのことを子どもに伝えなければならない。つまり、子どもをそのまま受け入れることによって、子どもの自己理解を高めることになるのである。

(3) 青年期の自己理解を育てる

青年期の生徒は、親から承認されるかどうかを気にかけながら、他方で仲間から認められるかどうかも重要な関心事になる。仲間から認められたり、認められなかったりすることで自己評価が激しく揺れ動く時期なのである。したがって、その生徒が仲間から安定した承認を得られるような機会や場を与え、また、そのようなサポートを与える仲間グループをつくりだし、維持するのを援助することが大切である。たとえば、学級内に一人一役の学校内の重要な役割を決めて活動させることで、かかわりあう機会を通して認めあえるようになっていくことなども考えられる。

思春期の生徒の特徴として他者からどのように見られているか、他者からの評価を大変気にするということがある。他者からの評価を気にすることは、他者のもつ基準のみによって自己の価値を定めてしまい、自己の価値基準を持たない、本当の自分を見失ってしまうという問題を生む。

他者から評価されるものの中で、この時期気にしやすいものの一つに、身体的外見や容姿がある。本来これらには、理想的な基準などないはずなのだが、個々人の描く理想像と現実像とのギャップに悩み、否定的な自己評価におちいりやすい。このような時は、外見よりも内面性、特に人格的価値が大切であることを繰り返し伝えることが重要である。日頃から、人格的良さが示されたら、肯定的な接し方をするよう心がける必要がある。

この時期は、自分なりの「価値」を作り出していくことが重要な課題となることがわかる。青年期以前は親が示してきた価値が絶対的なものとして受け止めてきていたが、親から精神的自立をするようになると、自分なりの価値基準を模索し、再構成し始める。そして、どのような価値基準を構成するかによって、自己評価・自己理解のあり方が決定され

ることになる。

この時期を生きる者にとっては、一人ひとりが自分の価値をつくりあげていく苦しい作業をしなければいけないのである。そのためには、自分は将来どのように生きていきたいのか、どうありたいのか、自分がどのような価値を求めているかを知るところから始めていかなければならない。価値を見出していく際の手がかりとして、自分はどんなことをしているときが楽しいのか、生き生きしているのか、自分らしくなれているのかに気づかせることが必要だと思われる。ただし、追究する価値が反社会的なものや自己中心的なものにならないよう気をつける必要はある。

乳児期から青年期までの自己理解を育てるための共通する教師の姿勢が4つある。

- ① 教師自身の自己理解を深めること
- ② 教師の受容的な態度と姿勢
- ③ 教師の共感的理解と客間的理解の統合
- ④ 組織を生かした多面的な視点の理解

以上の4つは自己理解を育てるだけでなく発達課題の達成や普段の学級経営にも役立つものである。

8 発達加速現象

最近の子ども達の身体発育はめざましく向上している。栄養の改善や医学の進歩による病気の減少、都市化に伴う生活様式の変化、育児の改善等により、身長は男女ともに大きくなっている。身長の最も伸びる年齢も男女ともに1～2年早くなっている。身体発育の向上とともに成熟も早くなり性的機能の発現の時期も早くなってきている。このように世代がすすむにしたがって、前の世代より発育が早くなる現象を発達加速度現象という。

性的機能の発現の時期が年齢の低い方へ推移していく現象を成熟前傾現象という。

身体発育の向上は好ましいことではあるが、近年の子ども達は自立心に欠ける傾向があり、体と心のアンバランスな傾向があると指摘されている。

9 事例（高校2年生男子の事例）

高校2年生の男子が不登校になり、50代の女性のスクールカウンセラーが、彼の担当になった。彼は、乳児期に母親が離婚し、父親の手で育児され、その後、父親は若い女性と再婚した。若い母親は、学校へ弁当を届けたりして、とても大事にして育てていた。

女性のスクールカウンセラーは、面談の後、彼に後をしつこく追い回されて困ったという。彼が女性のスクールカウンセラーを追い回す感じは、異性を追い回す感じではなくて、母親を追い回す感じであると女性のスクールカウンセラーは言っていた。

乳幼児期に身につけるべき習慣を後からつけようとしても、身につけてしまった悪い癖

や習慣はなかなか直らない。

人見知りや後追いがあるということは、「見知らぬ人へ対して恐怖心や羞恥心がある」ということである。

だから、人見知りや選択した後追いは、子ども自身の生命を守ったり、他人との社会性・社交性を正しく身につけたりする大事な発達課題なのである。

10 演習

(1) 逆上がりができない小学4年生の児童に対して、周囲の承認、自己有能感や自尊心が持てるような方策を考える。(エリクソンの発達課題を参照)

① 個人への働きかけ

② 集団への働きかけ

(2) 自分の成長過程(乳児期・幼児期・児童期・青年期)に経験したことで、自分の人格形成に影響を受けたことを述べる。

① 幼児期

② 児童期

③ 青年期

《参考引用文献》

日本学校教育相談学会「学校教育相談学ハンドブック」ほんの森出版, 2006年

小学校学習指導要領解説「総則編」

澤田瑞也・小石寛文・佐々木正宏「こころの発達と教育臨床」倍風館, 2001年

清水勇・樺澤徹二「生徒指導・学校カウンセリング ワークブック」学事出版, 2000年

濱口佳和・宮下一博「子どもの発達と学習」北樹出版, 1997年

福島脩美・樺澤徹二「学校カウンセリングの考え方・進め方」金子書房, 2003年